宗像

神門前の賑わい

平成二十三年・正月
厳しい寒さの中、
三が日で約58万人が参拝

平成二十三年（辛卯）皇紀二千六百七十一年の年が明けた。

新年を迎えるにあたり、昨年も厳寒の年越しであったが、今年は昨年以上の寒さとなり、今冬一番の寒さで北からの強風が吹き荒れ雪もちらつく厳しい年末年始となった。

大晦日午後三時、雪が降り突風吹き荒ぶ中、新年を清々しい気持ちで迎えようと三〇〇名を越える人々が参列され、「年越しの大祓」が行われ、引き続き本殿で平成二十二年を締めくくる「除夜祭」が斎行された。

日が暮れて午後十一時半頃には駐車場は満車と

昨年末、筑前大島の最高峰御嶽山、その頂に鎮座する御嶽神社の境内で遺跡発掘調査が行われ、奈良三彩や滑石製の人形・舟形等、沖ノ島の露天祭祀と同類の神宝が出土し、関係者を驚かせた▼同社は中津宮・湍津姫神の荒魂をお祀りする。伊勢神宮の別宮「荒祭宮」に代表されるように、神道では神の穏やかな御姿を「和魂」、荒々しい御姿を「荒魂」と称し、それを別々にお祀りし丁重に祭祀を行った▼神道の基は自然崇拝だといわれる。自然は国土に四季を巡らし豊かな森を育て、それにより命が生かされる。しかし、時として台風・雷等、命を脅かす恐ろしい存在にもなりえた▼大島浮かぶ玄界灘は、海の恵み豊かな漁場として知られる一方、冬は季節風により荒れる海としても名を馳せる。海を生活の場としてきた島民にとって、宗像大神の神助は不可欠なものであった▼人々は荒れる海に御嶽神社の神威「はたらき」を感じた。その「はたらき」により、海が洗われ豊かな漁場を育んだ▼身近には悪い事でも、総体的に見ると自然律に適う。和魂と荒魂、どちらも欠かすことのできない神の恵みなのである。今回出土した御神宝に、海の民の感謝と畏怖の念の深さに思いを馳せる。（床）

遷宮で 結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

2月祭事暦

毎月1・15日 月次祭
午前10時～
高宮祭
第二宮・第三宮祭
宗像護国神社祭（1日）
午前11時～
総社祭
浦安舞奉奏（1日）
豊栄舞奉奏（15日）

3日
節分祭　午前11時～
於＝本殿
豆打ち式　午前11時30分～
於＝本殿横特設ステージ

11日
建国祭　午前11時～

神具・装束・授与品
井筒
装束店 〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る フリーダイヤル 0120-075-980
福岡店 〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401 フリーダイヤル 0120-055-092
授与品店 〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23 フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家　匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元4丁目1-20 電話(0940)32-2567

元旦午前零時、開門とともに本殿へ進む方々

なり、周辺道路では渋滞が始まった。

例年であれば、参拝者の皆様に暖をとっていただくため篝火を焚くのであるが、日中からの強風が止まないため焚くことができず、寒風をまともに受ける状況であった。しかし、寒さに耐えながらも神門前には大勢の参拝者が列をなし、境内は人で埋め尽くされた。

一方、受け入れ態勢は、事故・混乱等不測の事態に備え、宗像警察署、地元消防団、ふくろう部隊（ボランティア団体）の皆様が境内各所につかれ、甘酒授与の奉仕に地元総代・協力会の皆様が神酒所に、神職・巫女や職員は各社頭で待機した。

午前零時、定刻に本殿の大太鼓が鳴り響くと開門され、拝殿前は一瞬で人々に埋め尽くされ、新年を祝い新たな気持ちで神前に祈りを捧げる参拝者で大いに賑わいを見せた。

夜が明け、元旦午前九時には新年最初の祭典である「元旦祭」が斎行され、高向宮司以下神職奉仕の下、国家・皇室のご安泰、国民の平穏無事が祈られた。翌二～三日まで新年の祭典が行われ、三日には宗像護国神社新年祭も斎行され、三日間の恒例祭は無事に終了した。

四日からは多くの会社が仕事始めで、前日まで家族連れで賑わっていた境内の様子が一転して、スーツ姿の会社員で溢れた。しかし天候は回復せず、寒さ厳しい仕事始めとなり、不況から脱却出来ない社会情勢ということもあり、皆さん厳しい表情で参拝されていたのが印象的であった。

境内では参拝者の皆様に冷えた体を温めて頂こうと、特別に開放している勅使館での茶房だが、この寒さにより例年にない賑わいをみせ、温かい抹茶・甘酒・コーヒーで冷えた体が温まり、大好評であった。

また昨今のパワースポットブームの影響からか、御本殿参拝後、高宮祭場へと足を運ばれ

総代の皆様の御奉仕による神酒所

開門を待つ方々

古札納所

る家族連れや若い方々が近年増加している。神社としても高宮祭場の縁起や位置づけを正しく認識していただこうと、年末より写真入りの看板を設置した。正月期間中も足を止め見入っておられる方を目にしたが、今後多くの方々の目に触れることで、全国でも稀な古代祭祀の場を守り伝えていきたい。

神門内、本殿前の授与所

既報の祈願殿横正面参道の改修とトイレ新築の影響は、昨年までに比べ確実に第一駐車場周辺の混雑が解消され、参拝者の皆様を混雑することなくスムーズに本殿へ誘導する事ができた。

一方懸案であったトイレは、場所を認知していただき浸透していくのはこれからだが、例年のような長蛇の列はみられず、こちらも新築した効果は大きかったように感じた。竣功間もなく、実際の運用には不安もあったが大きなトラブルもなく順調に稼動した。

福みくじ授与所

三が日の人出は、三日間とも雨雪まじりの寒い日が続いたため、当初予想した六十五万人から七万人少ない五十八万人であったが、積雪した福岡県内の内陸部に比べ、玄界灘からの強風が幸いしたのか積雪することもなく、三日間とも午前十一時頃から駐車場は満車状態となり、多くの方々が新たな気持ちで新年を迎えた。

本年冒頭の月次祭で、高向宮司は「日本には四季があり、寒い季節があるからこそ、春の喜びを感じる事ができる」との挨拶を氏子・崇敬者の前で行った。我々の先祖は数千年前より、自然に畏敬の念を抱き、その中でお互い助け合う互譲互助の精神を大切に暮らしてきた歴史がある。

車を整理され参拝される方々

人間が自然に対しいかに無力であるかを痛感した年明けだったただけに、回復の兆しの見えない景気や、波乱含みの政局をはじめ様々な問題を抱える今の日本であるが、今一度気を引き締めお互い助け合いながら、新たな気持ちで一年をお過ごしいただきたいと思う。

出光興産(株)の参拝

年末に設置された高宮祭場の案内看板

筑前大島中津宮の正月

師走に入り、寒波の影響で全国的に荒れた日が続き、漁村大島でも正月を前に出漁できない日が多く見られた。とくに歳末、この冬一番の寒波が到来し、海上は大時化にて大晦日には、渡船フェリーも数便欠航するなど帰省者の足にも影響がでる中、午後より沖・中両宮奉賛会・同翼賛会員の奉仕により社殿・境内の装飾、福みくじ授与所設営等、新年を迎える準備が進められた。午後五時、神門前にて年越大祓式、引き続き本殿で除夜祭が斎行され、平成二十二年の祭典が締められた。

年明け午前零時、境内に太鼓の音が響き、奉賛会員の奉仕により開門、参拝者は神前に進み、新玉の祈りが捧げられた。寒風吹きさす中、参拝者の出だしは鈍いものの、徐々に島内の氏子や里帰りした人達で境内は賑わいをみせる。

社頭では、正月の縁起物の破魔矢・福俵・熊手、干支卯の一刀彫等が授与されると共に、毎年恒例の「中津宮新春福みくじ」が翼賛会の奉仕により行われ、宗像農業協同組合大島支所より特別協賛を賜り、授与所には新年の福を授かろうと多くの参拝者が詰め掛けた。又、境内では巻網船団の宮地丸組、春日丸水産、沖栄水産から寒鰤を、沖西敏明氏、古賀愛野氏、山口クニエ氏からは野菜のご芳志を頂き、『開運大鰤鍋』が本年も振舞われ、大島ならではの冬の味覚が参拝者の凍えた身体を温めた。午前七時、神前に島内外から献上された御初穂や海の幸・野の幸等がお供えされ、元旦祭が斎行された。奉賛会・翼賛会会員を始め島民が参列する中、国家安泰と皇室の弥栄、島民・国民の幸福が祈念された。

翌二日も生憎の雨模様の天候となる。大島では毎年この日に、正月時の帰省に合わせ、成人祭・同年講厄除祈願祭が慣例となっており、午前十一時、十一名の新成人と保護者・恩師が参列、成人祭が斎行された。又、それを前後して、三十三才、四十一才、四十四才の各々に厄除・晴厄の同年講祈願祭も斎行され、境内ではあちらこちらで、久しぶりの同級生との再会に話が弾んでいた。

正月三日、午前十一時、高向宮司奉仕のもと、元始祭並びに宗像漁協大島支所の大漁祈願祭が斎行され、奉賛会・翼賛会員並びに漁協職員、漁業従事者が多数参列。神前に国の元始を言祝ぎ、本年の海上・操業安全・大漁満足が祈念された。

尚、九日には還暦奉賽祈願祭が斎行され、今年還暦迎える三十一名が参列、祭典後には一ノ鳥居前にて餅撒きやリヤカーにてパレードが行われ、大いに賑わいをみせた。

今年の正月祭諸祭典斎行にあたり、多大なるご協力・ご協賛を頂きました氏子・崇敬者各位には衷心より御礼申し上げます。

還暦奉祝の餅まき

正月の様子

中津宮での福みくじ

ブリ鍋を囲んで

大島の新成人の皆さん

年越しの大祓神事・除夜祭

平成二十二年最後の祭事である年越しの大祓神事並びに除夜祭が、十二月三十一日午後三時より、寒波襲来による寒風吹き荒ぶ中ではあったが、多くの参列者を迎え厳粛裡に斎行された。

大祓式は七月三十一日とこの十二月三十一日の年二回行われているが、七月を災難消除、五穀豊穣を祈る「夏越（なごし）の大祓式」、一年の罪・穢を祓い清々しい気持ちで新年を迎えていただく十二月を「年越しの大祓式」と呼んでいる。

当日はこの冬一番の寒さとなり、突風小雪の降る天候であったが、新年を清々しい気持ちで迎えようという多くの参拝者が予想に反し多数参列された。ブームとなっているパワースポットの影響もあるのか、その数は年々増加傾向にあるように感じた。

定刻、新年を迎える準備が整った神門前には、続々と参拝者が詰め掛け、高向宮司以下奉仕神職が参進、まず葦津禰宜が大祓詞を奏上、続いて参列者各人に配られた「切麻（きりぬさ）」で祓い、続いて「祓物（はらえつもの）」に息吹を吹きかけて切り裂き、天・地・人形を「大麻（おおぬさ）」にて祓い清めた。

参列された小さな子供から年配の方まで寒さに震えてはいたものの、神事が終わると清々しい表情が溢れていた。

引き続き、本殿で除夜祭が執り行われ、その頃になると大粒の雪が降りだす中ではあったが、今年一年戴いた宗像大神様の御加護に感謝し、皇室・国家の繁栄、氏子崇敬者の皆様方のご健勝を祈念し、平成二十二年の諸祭儀は全て滞り無く終了した。

その後、神門は一旦閉じられ、平成二十三年元旦午前零時に再び開門、多くの初詣参拝者をお迎えした。

雪が降る中斎行された除夜祭

大祓式

由緒記「宗像大社」内容を一新

初穂料 一、〇〇〇円

当大社には学術書である「宗像神社史上・下・附巻」をはじめ、読み物として「むなかたさま」等がございますが、写真を中心に最も分かりやすいのが「宗像大社」です。

この度、一月一日付で発刊し、新年より授与所でお受けいただいておりますので、ご紹介致します。

サイズはB5→A5へとコンパクトにし、ページ数を倍以上の80ページとしております。

約五年間に亘り撮影した神社側だからこそ撮れた写真を豊富に用い、宗像三宮各所をはじめ、所蔵する神宝や祭事についても、皆様に分かりやすく掲載しております。

本殿・祈願殿各授与所でお受けいただけます。

献米奉告祭斎行

正月の余韻をまだまだ残す一月十三日午前十一時、氏子の皆様から寄せられた新穀を御神前に献上し、昨年秋の収穫を神恩に感謝すると共に今年の五穀豊穣、無病息災を祈る献米奉告祭が斎行され、祭典後には鏡開きが行われた。

年明けから雨や雪が降る日が多かったが、祭典当日は久しぶりの晴天に恵まれ、置鮎氏子会長以下、宗像・福津両市内の氏子総代多数が多数参列され厳粛に執り行われた。

祭典では高向宮司の祝詞奏上に続いて、矢野邦彦氏（宗像市城南ヶ丘）が氏子会を代表し氏子奉幣使として御奉仕された。同氏は前日より当大社に斎泊精進潔斎の上、斎服を着装して祭典に臨まれ、着慣れない白衣白袴、冠等に戸惑いながらも無事に氏子奉幣詞を宗像大神の御前で奏上、大役を見事に果された。続いて、巫女による「浦安舞」が奉奏され祭典は滞り無く終了した。

また祭典終了後、氏子会を永年お務めいただいた勝浦地区の中野政登氏に感謝状と記念品が贈呈され、参列した一同から温かい祝福を受けられた。

その後、清明殿を会場に「鏡開き」が行われ、直会として雑煮・ぜんざいを頂き、新しい一年を清々しく過ごすことができると和やかに当大社を後にした。

尚、ご奉納いただいた献米は、日々の日供祭をはじめ諸祭典の神饌としてお供えし、皆様方の安全と繁栄を御祈念致しております事を御報告致し、衷心より御礼申し上げます。

感謝状を受けられる中野政登氏

氏子奉幣使を御奉仕された矢野邦彦氏（写真右）

清明殿での鏡開き

浦安舞

節分祭の御案内

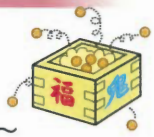
本年も下記日程で節分祭を斎行致しますので、皆様振るってご参列下さい。

宗像観光協会主催　豆まき

2月3日（木）

◎節分祭　午前11時～
　於＝本殿

◎豆打ち式　午前11時30分～
　於＝本殿横 特設ステージ



※両日とも少雨決行ですが、雨天の際は昨年同様、祈願殿にて祭典・豆まきを行います。

(続) 浜の寄物

252

いしい ただし

制空・海権を失ない追いつめられていく日本軍、特に太平洋諸島に展開する日本軍は、島に閉じ込められ玉砕が続く。北のアッツ島からサイパン、硫黄島と悲報が続く、太平洋諸島を制圧すると共に大型爆撃機B29は首都東京から地方都市まで飛来して爆弾の雨を降らしていく。

昭和十九年三月の東京大空襲は十万人が死傷している。

堺氏はどうか、昭和十九年八月から十月のビルマ断作戦に参加、この時に小隊長兼指揮班長を命じられている。

昭和二十年二月にピンマナ出発、二十五日にカンボジア・プノンペン着、明号作戦に参加、四月頃『米軍が沖縄に上陸したとの情報が我々にも入り、海軍の将校等の話によると、「日本は負けだ。もう日本は駄目だ」と悲観的なことを言う。「日本に軍艦は無くなった」と自棄になっていた』。

昭和二十年八月一日に陸軍准尉となる。副官は「特進だよ師団で君一名だけ」と言われた。

捕虜収容所警備隊長を命じられた。

八月十五日正午、玉音放送があるという伝達があった。その日はとても暑い日だった。連隊長以下何十名が聞き入っていた。私には放送状態が悪くさっぱり理解できなかった。

連隊長から戦いに負けたことを知った。『皆虚脱感で全くなす術を失なっていた。密かに身辺整理をしていた』

十一月になって戦犯容疑の呼び出しを受けたので逃避、タラットへ転属、混乱する現地で、仏軍、越南軍、共産ゲリラ等の交渉や日本軍の安全等の処理等に奔走、昭和二十一年三月タラットからサイゴンに移駐、サイゴンに着いた『我々は仏軍の命令で直ちに武装解除だという。各部隊毎に分かれて小銃、拳銃、軍刀、弾薬等山と積みあげた』解除後捕虜生活に入る。

四月十九日にサイゴン港出港(部下の遺骨七柱捧持)五月三日、鹿児島上陸、復員業務として下士官と兵に三百円、将校千円程の退職金と毛布を受領「軽い毛布二枚と背嚢一つで郷里へ昭和二十一年二月七日「只今帰りました」と玄関で声を張りあげた。

母が飛び出して来て、声も出ない様子「お帰り」と言って私をじっと見ていたが、暫くして「よく生きて帰れたね」と涙を流して喜んでくれた。生涯母の涙は忘れることは無い。

堺氏はその後、昭和二十一年九月に新潟県小千谷移住、国鉄に勤務、同三十四年小千谷市会議員となり、同三十五年五月の安保改正阻止国民会議国会請願デモに新潟県代表として参加、同三十八年八月には第九回原水禁大会、分裂大会に国労代表として出席、同三十九年五月勲六等瑞宝章受章。

昭和五十二年三月国鉄退職。同五十五年九月宗像大社嘱託(神宝館勤務)となる、福間町の地域活動にも献身、平成十三年五月に自分史執筆をはじめ同十四年「幾山河を越えて激動の八十年」を完成。尚、この自伝を電子文書化するため、時代背景、写真、文献そして解説を九州工業大学名誉教授の野上暁一氏が加筆して充実した内容とした。

第五九四回 宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日〆切

北九州市 八幡西区 豊田 光子

兵役も飢餓も知りたる跡歩む海越えて来し唐人の墓

評 元寇の跡だろうか、兵士を思いやる作者。結句は字余りになるが〈唐人の墓まで〉。

うきは市 浮羽町 向 則正

戦死せし父を知らねばその歌も尽きわが残生も心もとなく

評 残生は一首に入れず、三句以降〈父を恋う歌詠み継げず心もとなし〉としてはいかが。

宗像市 土 穴 山本 静子

歩く朝二つほおばる那智あめに老いのホッペのしばしふくよか

評 九十一歳の作者の楽しい歌。四句は〈老いのホッペタ〉としても良いのでは

福津市 若木台 山崎 公俊

宗像は女神を祭り宮地嶽は男神祀れり海辺と山辺

評 着眼点が良いのだが、宮地嶽神社の祭神は神功皇后と隋従の勝村・勝頼大神とのことで、「男神」は「男神も」か、再考を。

宗像市 自由ヶ丘 伊藤 慶子

菊香る拝殿高く納吟の年重ねをり表章受けて

評 年々の納吟が認められ、表彰された喜びの歌。二句は〈高き拝殿に〉

北九州市 八幡西区 吉田ウト子

川尻に向ふ水泡のひと群のみか潮に合ふやUターン始む

評 川下にむかっていた泡が満ち潮に押され向きを変えたところを捉えた観察眼と、「みか潮」が活きた一首。

福岡市 南 区 井田有久衣

西安（シーアン）のはずれの杜（もり）の黄帝陵奉拝の人姿も見えず

評 賑わいを想像していたのに人気のない黄帝陵に驚きと寂しさを覚えた作者だろう。

福津市 中 央 池浦千鶴子

ひからびて石榴の実二つ下がりをり季の来ざれば落つるもならず

評 石榴の実二つは老夫婦の象徴のようでもあり、作者は人生と重ねて見ているのだ。

福津市 星ヶ丘 佐々木和彦

ただ立ちていたるのみにて役目をば果たして来たり電信柱

評 電信柱は立つことが役目。人も同じように存在するだけで良いのかもしれない。

宗像市 日の里 大和美由紀

小春日の里宮巡りたえまなき水音聞きて心ほぐるる

評 いかにも気持ち良さそうな一首。絶え間ない水音はどこから聞こえるのだろう。

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子

鍵かけて走る車の中に有るこれも私の一つの世界

評 作者の多彩な世界の一つ、車の中。初句鍵かけては〈ロックして〉の方が車らしい。

北九州市 八幡西区 遠藤 幸子

父母若き日々のにぎわいはるかなり互みにふれつつ山茶花の咲く

評 子供時代は大家族で賑やかだったのだろう。山茶花の花に浮かんだなつかしい世界。

選者詠

季（とき）問へばいつでも「春」といふ母の病室かざる注連縄を買ふ

早朝を頬なで覚ますこの風は冬将軍のおさなむすめら

第五六九回 俳句作品集

宗像市 日の里 花田いつ枝

振れば鳴る英彦がらがら八ッ手の花

福津市 勝浦 高山 睦子

冬深しまるまって寝る古墳かな

宗像市 平井 占部 詩子

若水の喉ごし身内に芯通す

編集後記

「過去こんなに長くお天道様を拝まない正月はなかった」古老神職の言葉です。天候に恵まれた地域もあるようですが、九州北部、日本海側に位置する当大社では、寒波が止まず大晦日～六日まで雨や雪、ようやく晴れ間が覗いたのは七日でした▼月も半ばを過ぎ、晴れる日も増えてきましたが、気温は上がらず平年以下が続いています。とはいえ、周辺道路は渋滞、赤子からお年寄りまでが押し寄せる様子を目の当たりにすると、宗像大神様の御神威（しんい）を改めて感じました▼一見御利益信仰と思われる方も、おられなかったわけではありませんでしたが、パワースポットブームからか、高宮祭場へ足を運ばれる方々を多く目にしました。また個人の御祈祷（しんがんじょうじゅ）も願望を叶える「心願成就（しんがんじょうじゅ）」が減り、感謝を捧げる「神恩感謝（しんおんかんしゃ）」が多いように思いました▼年末からタイガーマスク現象が報道されていますが、神社にいても個人より社会全体へ、成就から感謝へと少しづつ意識が変わりつつあるのを肌で感じた正月でした。（塚）

発行所 宗像大社社務所 宗像会
〒811-3505 福岡県宗像市田島
電 話 0940-62-1311（代）
発行人 葦津幹之
編集人 大塚宗延
制 作 ゼネラルアサヒ
印 刷 ゼネラルアサヒ
毎月1日発行 定価1年送料共1,000円